



(社)日本アマチュア  
オーケストラ連盟

# Youth Journal

コース

ジャーナル

VOL. 29

発行所  
(社)日本アマチュア  
オーケストラ連盟

[ J Y J 編集長 ]  
〒272-0115 市川市富浜 3-17-1-107  
小 室 二 美 恵  
電話 (047) 397-3597

[ J Y J 担当 ]  
〒441-8028 豊橋市立花町46 光陽ビル3F  
下 谷 剛 嗣  
電話 (0532) 33-6885  
FAX (0532) 33-6875

## 初のヨーロッパコンサートツアーは大成功

— Japan Youth 世界へ飛び立つ —



チェコ・ブラハのドヴォルザークホールにて

さる平成十年七月十六日から二十六日までの十一日間、「ジャパンユースシンフォニーオーケストラ'98 ヨーロッパ公演」が敢行された。トヨタ青少年オーケストラキャンプが始まってから十四年、初の海外公演だ。ドヴォルザークの故郷ブラハ、音楽の都ウィーン音楽祭に招待されたセゴヴィアで、ウエバー・オベロン、芥川也寸志「弦楽のための三楽章」、ヴィヴァルディ「四つのヴァイオリンのための協奏曲」、尾高尚忠「フルト協奏曲」、ドヴォルザーク「交響曲第八番」、外山雄三「管弦楽のためのラプソディ」を演奏した。

### 世界遺産の古都にて

社団法人 日本アマチュアオーケストラ連盟

理事長 森下 元康

何もかもがもの珍しく、興奮気味の日本青少年交響楽団の一行が、二時間遅れてブラハに着いたときにはもう朝は間近だった。雨の成田空港を後にして十二時間、さらにフランクフルトの渋滞に巻き込まれてのバスの長旅に、よくぞ病人がでなかったものだ。

ドヴォルザークホールに足を踏み入れた我々を迎えたのは、ブラハの少年少女の四名。ヴィヴァルディの四つのヴァイオリンのための協奏曲の練習中であつた。その音の美しさに一同呆然。しかし練習をはじめたわがオーケストラも、ホールに助けられなかなかの響きではないか。

モルダウのほとりでのドヴォルザークホールで、その交響曲を演奏できる幸せ。今回心ならずも病のため渡欧を断念された猪本先生のはからいのおかげである。心配した聴衆も多数来場してくださった。自分が指揮をしているときにはなんとも思わないのに、客席では気がもめてしかたがない。世界アマチュアオーケストラ連盟の仲間であるチェコのボダク青年とお母さんがじつと聞き入っている。

感動と不安が交錯しているうちに最後の八木節が興奮を巻き起こして鳴り終わった。手を高くあげて拍手する人々。すると私の席の斜め前の若いカップルがすつと立ち上がる。そしてそのスタンディングオベーションの波が会場全体に伝わっていくのを見て時間はかからなかつた。海外初のコンサートでこのような暖かな拍手と感動を与えてもらったメンバーは一生の記

念になるであろう。

旅はウィーンへセゴヴィアへと続いていった。どの土地にも音楽がしっかりと根付いた生活があり芸術を大切に人々が住んでいる。このツアーの真価は、その土地で自分が主人公になることだ。見学したり聴衆になる旅も素敵だけれど、自分自身の中に密やかな成長を確認するには、まさにその土地の空気の中で音楽を奏でることだ。

今回の日本青少年交響楽団の編成は今回限りである。人は集つてもいつかは別れねばならない。青春をどのように過ごそう

が自分の勝手というは嘘だ。人は何かに向かっていたり、何かのために耐えることによつて強くなっていく。いやこの場合は「動い」という言葉がふさわしい。十一日間の旅とはいえず互いに我慢したり励ましたり、きつい旅だったはずだ。きつと心の身長がぐんと伸びたに違いない。そして心ならずもいろいろなる事情で参加できなかったメンバーのことも忘れないでほしい。

帰って四日目はフェスティバルの金沢大会に出掛けた。別に報じられたように、世界アマチュアオーケストラ連盟が設立された。次の海外公演はこのネットワークが有効に動いてほしい。金沢大会の帰りに、北陸本線の車窓の風景は燃える夏を忙しく過ごした私をほつとさせるような和らいだ風景であつた。さあ少し休もう。

# 旅その日その日

ツアー終了後、一部の参加者に依頼し、その日のことを日記風に振り返ってもらいました。

一日目(七月十六日・木)  
成田に集合、総合練習、結団式を行う。

午後一時のチェックインを目指し続々と参加者が集まり出しました。早く到着したグループは二時から音出しを始め、人が増えるとTYOC運営委員を中心にセッティングが進み、会場全体が次第に盛り上がり過ぎてきました。音響のない部屋と移動の疲れからか、総合練習は聞いていられるもどかしい感じがしましたが、その後はなんとか持ち直したと言つことにしましょう。

二日目(七月十七日・金)  
成田からフランクフルトを経由してプラハへ。

午前中は成田のホテルで総合練習、午後、航空機に乗ってフランクフルトへ向かう。機内では映画「タイタニック」が上映され、皆が涙と感動に包まれていた。タイタニックが沈む寸前まで演奏を続けたカルテットの一人が、仲間との別際に「諸君と演奏できたことを光栄に思う」と言った。この台詞が心に残る。この旅も、最後にこう言えるようなものになるという。半日近くを機内で過ごし、フランクフルトに到着した。ここからバスで国境を越えてプラハに向かうのだ。何か所かでの休憩、国境での審査の後、プラハに着いたのは十八日の早朝だった。

結団式では少しばかり料理が残ったけれど、ツアーに向けての結束が固まったのではないかと思います。また見えないところでは、ヴィヴァルディの「四つのヴァイオリンのための協奏曲」(井崎先生もご存知なかった)のためにテープやスコア購入の為に東京を走り回った人もいました(T君、Aさん、私)。それぞれ大変な思いをして参加したヨーロッパツアーがはじまりました。その内容は次のKさんよろしく。(ツアーに参加できなかった結団式 臨時司会者)

ホテルの部屋から夜明けの空と街を眺めた。ここの人々はどのような生活をしているのだろうか。ここでの演奏はうまくいくだろうか。長旅で少し疲れていたが、観光、そしてドヴォルザークホールでの練習を楽しみに思っていた朝だった。(K)



ホテル日航成田にて総合練習



プラハの宿泊地・ホテルオリムピック



真剣な総合練習



尾高尚忠作曲「フルーツ協奏曲」 フルート：菊池香苗

三日目(七月十八日・土)  
午前中はプラハ市内観光。午後はドヴォルザークホールでの練習。

到着がかなり遅れて夜明けにホテルに着いたのもつかの間、プラハ市内観光となった。正直言つて長時間の飛行機、バスで疲れまくつて観光なんかどうでもよいやというのが本音であった。またバスに乗せられ、プラハ城、カレル橋、プラハ市街などを歩いた。短い時間の中での観光のためゆっくりと見ている余裕はなかったが、海外旅行は初めての自分にとって目に付くものがすべて夢の中に見えるように

なくらい日本とは違う世界にいた気がする。そして、ドヴォルザークホールでの練習。これまた日本にある近代的設備のホールとは違って古臭いイメージのホールであるが、ステージの造りも残響も素晴らしいものであった。その夜の夕食時の出来事。セゴヴィア(スペイン)にてアンサンブルをすることが決まった。突然のこと参加者がいろいろもめて一時パニック状態となったが諸事情を聞き、夕食時間を割いて編成、選曲が夜遅くまで話し合われた。(H、K)

皆さん、プラハでのみ演奏したヴァイナルディ「四つのヴァイオリンのための協奏曲」ってどんな曲だかご存知でしたか？ 実は井崎先生を始め(たぶん)誰も知らない曲だったんです。しかも日本を離れる数時間前までスコアもなかったんです。すごくマイナーな曲だからT君がなんとか見つけたから一枚のCDと、Aさんのウォークマンだけが日青響の音源でした(井崎先生はこれでこの曲を勉強しました)。でもスコアは日本では入手できないのではないかと

も考えられていたので、皆さんの練習中も頭をひねらせていたんです。しかし、なんと、吉水先生からそれらしきスコアがあること成田出発前に連絡がありました。そして成田出発の日、早朝五時、ツアーに参加しないある若者Yが一人成田から上野まで電車で行きました。そして皆で空港に向けてホテルを出る直前、この曲のスコアは初めて日青響の前に姿を見せたのです。こんな裏事情があったなんて知らなかったでしょ!! (結団式司会もしたY)

よ。音もすぐきれいだし！ F.. 四人のアンサンブルもよく合ったね。 A.. 第四ヴァイオリンの男の子は、演奏会後のレセプションにも出ていたよ。 F.. うん。お土産として、第四回TYOCのCDと、ツアーのポロシャツをプレゼントしたけれど、喜んでくれたかな？ A.. 喜んでくれたらいいね。この公演は皆うれしかったのではないかと思います。この経験をいい意味で次の演奏会に役立てられればいいな、と。

四日目(七月十九日・日)  
ドヴォルザークホールにて本番、鳴り止まぬ拍手、そしてスタンディングオベーション起こる。F.. Nさんは「完全に無駄が多い」と言っていたけれど、プラハ公演でAちゃんがうれしかったことは何？ A.. 練習でなかなかオケがまとまらなくてすごく不安だったの。本番は成田からプラハ公演前日までと比べて一番良い演奏ができたこと、それに対するお客さん(いっぱい来てくれて)の反応がものすごく良かったこと。これが一番かな？

F.. わたしはお客さんを見ている余裕はなかったな。残念。話は変わるけど、ヴァイナルディの四人のヴァイオリンのソロスト、上手だったねえ。右手の使い方が違うよ。 A.. 弓が弦に吸いついているみたいだった。細かいパッセージも手首がなめらかに回って見ていてつらかったです。

五日目(七月二十日・月)  
プラハからバスでウィーンへ移動。午後から夜にかけてORFでの練習。ドヴォルザークホールにおける感動の演奏から一夜明け、今日はウィーンへの移動日です。みんな期待に胸膨らませ、ハト胸ポッパー、クルポッパー、その足をバスへと運ばせました。自分は三号車。その前に立ち止まり車内へ一歩踏み入れた瞬間、動物の第六感がこれからは起る悪夢を予感させました。案の定、バスは冷房が効かず、車内はサウナ状態。寝ようとしても寝られず、窓も開けられず、おまけに、国境では一時間以上の足止め。予定より随分遅れた。ようやく音楽の都ウィーンにたどり着きましたが、着いたあのポロシャツは汗だくとなり、三日後には悪臭を放っていました。そのような状態で始まったORFでの練習は明日へのプレリウドなものでした。(よっちゃん)

日青響が日本を発つ午後、成田空港の北ウィング搭乗口は百のポロシャツで埋まっていた。このポロシャツは白と明るい緑で、胸には力強い字体で「日青響」と書かれていた。皆は思い思いに着こなして、個性を出していたようである。これは毎日着ていたわけではなく、はぐれる危険性のある移動日に着てい

たが、その効果は絶大であった。着ている側からは賛否両論あったようだが、空港などでも遠くから見てそれと分かる明るい色合いは、迷子防止に役立っていたに違いない。最後の公演であるスペインの演奏会の後には、ポロシャツに寄せ書きをして、アーを思い出すことだろう。揃

いのユニフォームと言えはもうひとつ、セゴヴィア音楽祭のTシャツがある。スペインに着いてから皆に配られたもので、紺地にピンクのプリント。演奏会前日に全員で着用して、ストリートパフォーマンスの地に繰り出したのであった。(チャルタツシユA)

田空港の北ウィング搭乗口は百のポロシャツで埋まっていた。このポロシャツは白と明るい緑で、胸には力強い字体で「日青響」と書かれていた。皆は思い思いに着こなして、個性を出していたようである。これは毎日着ていたわけではなく、はぐれる危険性のある移動日に着てい

たが、その効果は絶大であった。着ている側からは賛否両論あったようだが、空港などでも遠くから見てそれと分かる明るい色合いは、迷子防止に役立っていたに違いない。最後の公演であるスペインの演奏会の後には、ポロシャツに寄せ書きをして、アーを思い出すことだろう。揃

いのユニフォームと言えはもうひとつ、セゴヴィア音楽祭のTシャツがある。スペインに着いてから皆に配られたもので、紺地にピンクのプリント。演奏会前日に全員で着用して、ストリートパフォーマンスの地に繰り出したのであった。(チャルタツシユA)



